

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フィールドワークの思い出
Author(s)	上水流, 久彦
Citation	アジア社会文化研究 , 24 : 60 - 62
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053972
Right	
Relation	



崔吉城先生を偲んで

フィールドワークの思い出

上水流 久彦

「上水流君、焼肉を食べる?」。北海道美唄市の焼肉屋で席に座った時に、崔吉城先生にこう聞かれた。焼肉屋に行き「焼肉を食べる?」と聞かれたのは、人生で初めてであった。

私は博士課程後期の途中、台湾での約1年半のフィールドワークを終えた後、先生の指導を受けるようになった。北海道には、先生の科研調査を手伝うために同行した。調査の目的は、第二次世界大戦以前に朝鮮半島から何らかの形で日本に来て、炭鉱で働くようになった朝鮮半島出身者の話を聞くことにあった。広島から札幌に入り、夕張、美唄、旭川、稚内を回る調査旅行であった。先生は在日コリアンが焼肉屋を経営しているのではないかと、そこから現地の在日コリアンとつながり、話が聞くことができるのではないかと考えて、選んだ店であった。つまり、先生は最初から焼肉を食べるつもりはなかった。先生はビビンバか何かご飯ものを選び、私は焼肉「定食」を食べた。

先生に教えてもらったことはたくさんあるが、戦前日本の炭鉱で働いた朝鮮半島出身者を追いかけて、2000年から2002年にかけてご一緒したフィールドワークが様々な意味で一番心に残っている。北海道調査に加え、長崎調査、福岡県の筑豊調査に連れて行っていただいた。

先生のフィールドワークにお酒はなかった。先生は昼間にフィールドワークを終え、「酒無しで」夕飯を食べた後、その日のインタビュー内容を書き起こしていた。そのため、朝の最初の話題は、前日のインタビューのことからであった。北海道の調査最終日、最後だからということで、寿司屋にて二人でビールを一本だけ飲んだ。そのせいだろうか、翌日の空港ロビーで飛行機を待っている間、先生は前日のインタビューの録音を聞いておられた。

北海道調査では著名な炭鉱地に行くことは決まっていたが、インタビュー

相手が事前に決まっているわけでは多くはなかった。したがって、どこに宿泊するかももちろん決まっていなかった。例えば、夕張に行き、面白い資料、面白い人と出会えたら、そこで調査をするというスタイルであった。「予定どおり」は先生の辞書にはなかった。とにかく、資料になるものがないか、次から次に訪問先のアイデアが出てきて、昼過ぎになってもその晩に泊まる場所（ホテルではなく、宿泊地）さえ決まっていない日もあった。ちなみに宿泊地が決まった後、宿を探すのは私の仕事であった。現在のように宿泊サイトがない、また、スマートフォンもない時代、いわゆるガラケーで宿泊先を探すのは骨の折れる仕事だったことは言うまでもない。

長崎の調査では、「軍艦島」が私には気になっていたが、軍艦島の話をして先生への反応は芳しいものではなかった。しかし軍艦島が遠くに見えた途端、先生には火がついた。近くの港まで行って漁船を借り、軍艦島を見に行こうということになった。当時、軍艦島のクルージングツアーは全くなく、整備さえもなされていなかった。私が交渉した漁船の船長も上陸はできないと言ったが、先生はそれでも見に行こうと言い、漁船をチャーターして島を至近距離から一周した。上陸できるようになったのは、それから数年後だったと記憶している。アグレッシブな先生に当時感動した私であった。

先生はレンタカーが好きだった。北海道でも長崎でも筑豊でもレンタカーを借りて自由自在に調査に回った。先生にとっては時間を気にせず、自由に人に会い、炭鉱関連の施設を見ることができることが良かったようである。だが、大学の事務方は処理に困っていたのも間違いない。

先生は運転ができなかったので、いつも私が運転をした。メロンが大好きだった先生は、夕張ではメロンをひと箱も買った。そして先生が助手席でメロンを切って、運転している私に食べさせるのだった。先生にメロンを食べさせてもらおう。「先生にそんなことしていただくのは申し訳ないです」と私が申し上げると、「気にしないでよ～。食べてよ～」とあの口調で言われ、メロンを私の口元にもってくるのであった。

さて、これらの炭鉱の調査では「強制」が研究の焦点の一つであった。朝鮮半島出身者の強制連行はあったのか、強制労働はあったのか。特に先生は強制連行の有無に疑いを持っていた。先生は、韓国の学術界において植民地

主義研究の開拓者であった。そして、反日という思想のもと日本の植民地支配を分析することや反日にそった結論を念頭に資料を集めることとは、立場を異にしていた。ここでは詳述しないが、それは、日本留学をして韓国に戻った時の経験も影響していたと思う。

データ、資料、証言に基づいて分析することは、研究者としては当たり前のことである。先生は植民地支配を肯定はしていなかったと思う。しかし、研究では、先生は実証的研究の実践者だった。先生の研究への批判（例えば、親日的だ等）は韓国でも日本でも聞く、また韓国と日本で言うことが違うと語る人もいる。それでも、私は反日的研究さえすればよいという韓国の植民地主義研究の在り方に、学問はそういうものではないという思いを持って先生は反対し続け、勉学を続けた研究者であったと考えている。

私が同行させていただいたフィールドワークでの自由奔放さは、その思いがほとぼしっていた証だったのではないだろうか。先生と直接お話ができるなら、そのことを真っ先に伺いたい。いつまでもお元気で、いつでもお聞きできると思っていた私が迂闊であった。「聞きたいことは、すうーぐ聞かないとね、上水流くん。研究者なんだから」。そんなお叱りが聞こえてくるようである。